

「ほ？パイプリしてほしい？」



「何も起きなかつたら全力でバカにしますよ？」

「なんすかこれ、催眠？」



『常識改變』

催眠アプリで俺とセックスしてる事に疑問を抱かなくなる生意気な後輩

「・・・あつ、先輩おつかれーっす、片づけちゃんと終わりました?」
「お疲れ、片づけは終わったよ」
「ミスったらまた店長に怒られますよ?」



ブルブル

「またってそんなにミスしてないぞ・・・たぶん大丈夫」
「びびってんじゃないっすかw」

バイトを増やすって聞いた時は色々不安だったけど
こいつが来てから助かってる

あれから数か月経ったけど
今はこうして帰り際に話すほど打ち解けた
見た目からは分かんけど仕事できるし明るいし良いやつではあるし
・・・でも、今でも一個だけ思う事はある



「今私の胸見てたまました？」

「見てねえけど」

「正直に言ったらちよつとだけ触ってもいいですよ」

「・・・見てねえ」



「何ちよつと悩んでんすかw」

（こいつ・・・まあ確かに一瞬見ちゃったけど）

悪い奴じゃないがとにかく俺をバカにする
しかも男として見てないのか
いつもこういう事言っておちよくってくる

(くそー、いつかぎやふんと言わせたい)

ブルブル

(ん？携帯が震えてる・・・なんだこれ
催眠アプリ？か勝手にインストールされた、なんだこりゃ)



『誰でもあなたの思うままに！魔法の催眠アプリ』

（なんだこりゃ、ジョークアプリか？）

「はーウケた、先輩は嘘ついても顔に出るからかうの楽しいなあ」



「そういう所嫌いじゃないっすよw

あっ今度飯でも賭けてトランプでもやります？」

イラッ

「さて帰るかな」

「ちょ、ちよっと待って！」

「はい？」

「これで勝負しようじゃないか！」

「なんすかこれ、催眠・・・アプリ？」

「そう、これで、えーと・・・催眠がかかるかどうかで賭けだ！」
「ふーん、別に良いですが先輩は『催眠がかかる方』ですよ？」
「えっ」

「自信あるんでしょ？」

「・・・うん」

「何も起きなかつたら全力でバカにしますよ？」

「・・・いぞ」

「ウケるw」

（もうバカにしてる・・・）



「あっ！私が負けたら何でも言う事聞くんでは効かなかったら焼肉おごって下さい！焼肉！」

「えっ・・・それは・・・」

「あれー？びびっちゃったんすか？」

「私はリスク負うのになー、ひよっちゃうかー」

「ぐぬぬ、わかった・・・」

「わーい焼肉わーい」

（後悔してきた・・・もう後に引けない・・・）



（催眠の効果を選ぶのか、それじゃあ・・・
『疑問を持たなくなる』でいいか）
ポチッ

「・・・なんすか」

「何か変わった事あるか？」

「いやなんも、つてかもうしたんですか」

「いつ変わるんだこれ・・・あっ、催眠完了って出てる！」

「でも私何も変わってないっすよ？」

「・・・」



(声にならない爆笑)

(うぐぐ、説明書に何か書いてないか……)

『催眠の度合いや効果には個人差があります』

効いてないように見える場合は

普段はやってくれないお願いをあえてしてみるなど

工夫をしてみてください』

って書いてあるな、うーん)

「はー笑った、じゃあ焼肉行きましょうか」

「ちょ、ちよっとまって!」

(イチかバチか催眠が効いてるつもりで……)

「胸触っていい?」

「はあ?」

「……ごめん!嘘だから!そういうんじゃない」



「別に良いっすけど？」

「・・・へ？」

「いや、へ？じゃなくて」

（これは効いてるのか？おちよくってんのか？

・・・よ、よし、それじゃあもう少し思い切って）

？

「え、えーと・・・パイズリしてもらっていい？ダメだったらあれだけど」

「いや、さっきから何をそんなキョドってるんすか？
パイズリくらい気軽にいつでもしてあげますよ」

（・・・ガッツリ催眠効いてるじゃん！）

(うおおお、服の上からでも大きいとは思ってたがこれは)

「いやいや乳見ただけで喜びすぎっしょ
すぐ顔に出るんだから・・・
こっちは見られて恥ずかしいんすよ?」

っ

(パイズリする事の方が

胸見られるよりよっぽどだと思
うけど・・・さすが催眠)

パイ

「いいから先輩の粗末なモノをさっさと出して下さいよ、ほら早く・・・」



「え？・・・」



!?

ポロッ



(・・・で、でけえ・・・こんな大きくなるもんなんだ・・・)



「普段話していると草食系っぽいのに
こんなえぐいの持ってたんすね
人は見た目によらないなあ〜」

「・・・ん？もうビクビクしてるけど早くないですか？
ちゃんと見てあげますから
見られながら無様に出しちゃって下さい♡」

グ
ポ

グ
ポ





「はあ気持ちよかった・・・」
「こっちも先輩の情けない顔見れて
結構楽しかったっすよ♪」

（若干バカにはされてるけど
賭けにも勝ったし何も言う事ないな
さて、それじゃあ催眠を解いて勝利宣言を）

（・・・ふーむ）

キュン

ニキュン



「ふうー食った食った♪お腹いっぱい！」

「すげえ財布が軽い・・・酒までたらふく飲みやがって」

「ごちでーす♪」

「まあいいか、俺の負けだし」

「そうっすよ勝負の世界は厳しいんですから」

焼肉をおごった

勝負は俺の負けという事になっている

もちろんまだ催眠状態だ

次はいつエッチな事しよっかなあ



「ちよっと汗かいちゃった」

(パタパタすると胸が見え……)

「ん?……あつ、また胸見てる!

隙あらばすぐおっぱい見るんすから
ほんっと先輩ってむつつりっすよね」

イラッ



「あっキレました？キレちゃいました？むっつりなのにい？」
(そう言いながら見えるようにパタパタしやがって……
イライラするしムラムラしてきたじゃねえか！)



「……えっ？なんすか？
そっちは路地裏ですよ？なにになにW」

「きゃーこわーい」

「あんなん見せられて興奮しない方がおかしいだろ
・・・生でやるけどいいよね？」

「はい、よかったー路地裏に連れこまれて服むしられたから
どんなひどい目に会うかとドキドキしてましたよ
先輩だからそんな事しないとは思ってましたけど」
「ゴムないけどいいよね」

「全然いいすよ」



「んあっ!.....くうっ.....」
(あれ?)

ズン
ズン
うわっ

「えっ、もしかして.....処女だったの?」

「う、うるさいなあ.....」

初めてがこんなデカちゃんとか超っらいんすよ!?!」

ゴクリ.....









(ふわぁ♡……頭なでられるの……かなり好きかも……)

ふわぁ♡
ふわぁ♡

ふわぁ♡
ふわぁ♡

ふわぁ♡
ふわぁ♡

ふわぁ♡

ふわぁ♡

「・・・んー、電車来るまでだいぶ時間ありますね
暇ですしここで時間潰しましよつか？」

「うん」

（たった今処女を奪われたのにもう暇を潰すかの話か
催眠中は初体験だろうがいつもの無駄話くらい
日常的な事って思ってるんだろぅなあ
・・・もっと色々試してみたいな）



そういえば催眠ってどれくらいの事ができるんだ？
試しに無茶な事言ってみるか

「母乳出して」



「何言ってるんですか？暑さでやられちゃったんすか
出るわけないでしょそんな」

「わわっ!？」

(おお、いけるのか!でもこういうのは戸惑っちゃうみたいだな)
「あー、あれだぞ、出るもんだから、そういうもんだから」



「・・・そっか、そうっすよね・・・先輩が言うならそうです」
「うんうん、じゃあ次は」

「奥を小突かれる度にイって」
「んあっ！」

「これっ、やんっ♡やばすぎっ！ダメェ♡」
(すげー本当に1回突く度にイってる)
「・・・出る、俺の射精と同時にイって！イっちゃまえ！」





「すごいな、ほんとに何でもでき・・・あれ」
「あゝ♡・・・あゝ♡♡・・・」
(やりすぎた・・・)

やり過ぎたと反省してつつ
催眠を母乳が出る前くらいの状態に
ぐったりしてる後輩を抱えながら二回やった後戻した







「はあ・・・先輩そろそろ・・・電車の時間」

「うん・・・じゃあ行こうか」

名残惜しかったけど
この日はここまでにして
後輩を駅まで送った



帰り道で催眠アプリについて考えた
あれだけ好き放題した後に
考える事じゃないけど
やっぱり良くないよなあ・・・

明日にでも催眠は解いた方が

うーん
うーん・・・

いや、明日考えよう

そうしよう



今日こそ催眠アプリを止めよう
そう思ってたらずると数日が経った
その結果アプリを消す所か
逆に後輩で色々試して
より深いアプリの使い方を知り
後輩を抱くのはもはや日課となってしまうて

「先輩ちーっす！」

「あ、ああ、おはよう
朝から悪いんだけど」

「ん？なんすかなんすか？」







「ふう。ふう。結構溢れたな。中に入ってる分はこぼさないでね」

「んっ。はい。こぼさないっす。」

「じゃあ仕事に戻るよ」

ふっ。♡

「。。。ん？」

先輩なにしてるんです？

早く仕事して下さいよ

「うん」

この後も何度か抱いては遠慮なく中に出した事が終わると後輩は普段通り仕事に戻るが大量に出した俺の精子は仕事中的の後輩の中を泳ぎ続ける俺は催眠にどんどんハマっていった



日に日に回数は増えていった
時間さえ空けば後輩を抱いた
「んっ……んっ……」

毎日してたせいかな
そういう催眠はかけてないのに
抱く毎に後輩の体は
感じやすくなってきた







「ふああ・・・
出しながらぎゅっとされるの
すきですう・・・もっとお・・・」

ブドユ~~~~

ぎゅ
~ス~

ゴボッ

ぐゅ
ぐゅ
ぐゅ

ぐゅ
ぐゅ
ぐゅ

ブドユ~~~~

ぐゅ
ぐゅ
ぐゅ

ブドユ~~~~

「全部出すまで離さないぞ・・・つくう」



「・・・あっ
出したなら離れてくれないっすか？
ずっと抱きつかれてるのは
先輩でもちよっと気持ち悪いんで」
「はい・・・」

終わったらこれだよ
ホントぶれないなあ
そこが良いんだけど



そしてこんな生活が続いていたある日
恐れていた事が起きた

自分の家でエッチをしようとした日
『先輩いっすよお、はいどうぞ』

ピーピーピーピー
携帯が鳴る



『携帯のバッテリーが切れます
催眠アプリを停止します』

『……あれ？』

（えっ、これやばくね？
．．．
そういうばヘルプに

催眠にかかっていた間の
記憶はちゃんと残っています
って書いてあったな
．．．あと）

（解けた瞬間に全て思い出すが
一時的に混乱する方がいますが
その際に起こるあらゆる事は
自己責任となります、って）



(やべええええええええええ)

「で、ごめん……」

555

（もう言い逃れできないけど
それはそれとして
取り乱す後輩かわいいな）

「ひぐっ。。。もうお嫁にいけない。。。」

「ってか何おつきくしてんすか！
こっちは怒ってんすよ！」

「まあまあまあ」

「ひっ！な、なに続けてんすか！」

「興奮しちゃった、最後までさせて」

「うぐっ、何をバカな事言っ
て・・・あんっ」

「だめです！だめっつってんのにい！」

「すまん、泣いてるのも可愛いから」

「やめっ・・・かわいいとか・・・」

「あっ、あっ、ああああ！」





「ひい……。ひい……。私……。どうして……。」

（頭がぱちぱちして、きもちい）

「次はもっと気持ち良くするから」

「そういう問題じゃねえっすよお……。んう……。」

はー♡

あ♡

ん
どろろッ

（股間がじんじんする

もっとしてほしい……

私の身体どうなっちゃったの）

「一回じゃ足りないから続けるよ？」

「……。勝手にどうぞ」











(す。すごい。中出しでイカされてる。私の身体。ホントに変わっちゃったんだ。もうこの人の物になっちゃったんだ。)

催眠中に何度も抱かれたせいで膣内射精に合わせて勝手にイってしまいうほど身体はチンポを覚えてしまったそして今後輩自身も改めてそれを理解した

数時間後

「はあ。。。はあ。。。」

「ふう。。。あの先輩
まだやるつもりなんすか？」

「後でちゃんと謝るから。。。もっと」
「。。。もお」
（夢中になりすぎっしょ）



「いっすよ」

「えっ？」

「気が済むまでしていいっすよ」

「ほ、ほんとに」

「いや、許したわけじゃないんで」
「はい・・・」





(もお、何で私なんかには死になっぺんすか
・・・あーどうしてこうなっぺんか
まあなっぺんはしゃあないかなあ)



「はあ・・・はあ・・・
すごく良かったよ」

「んう・・・そりやどーも」

ズボッ



んんー♡

んん♡

んん♡

「そういう日は今日は危険日なんですけど
考えてやってました？」

「・・・」

「もう怒ってないんで顔あげてくださいよ」
「色々とすいませんでした・・・」
「はあ、謝るくらいならやらなきゃいいのに」
「返す言葉もありません・・・」

「というか済んだ事はいいんすよ

問題は今後の事です

まあ絶対デキちゃってんでしょうけど」

「はい・・・」



「まず言っときますけど堕ろす気無いんで」
「!?!」



「えっ、えっ、だって俺の事嫌いって・・・」

「いやいや、ちゃんと催眠の前に言いましたよ
先輩の事は嫌いじゃないって

・・・私いつもこんなだから
よく怒らせちゃうんですけど
先輩は付き合ってくれるんで
だから嫌いじゃないですよ」

っ

「そ、そうなの？あはは」

「あ、そういう感じのはキツイんで
やめてもらっていいっすか」

「はい・・・」



「さて、言う事言ったんで・・・」
（やっぱ何かあるのか、ただじゃ終わらないよなあ・・・
ピンタでもされちゃうのかな）

うー！！

ふふふ



「じゃあ私を好きにしていっすよ」
「。。。えっ！」

「ほ、ほら、催眠かかってたわけだし
賭けに負けたら何でも言う事聞くなって約束だから
。。。わ、わかるでしょ！だから、はい」



「。。。」

「なに無言で勃起してんすか！も〜！
そういうところっすよ！そういうところっすよ！」

もあ——！！

んん

んん



このあと約束通り

翌日の昼まで後輩を好き放題しました

おしまい



























































































































